

# 宮崎県都城市方言における句レベルの韻律構造

言語学・応用言語学専門分野

2019（平成 31）年度入学

福田凧子

2023（令和 5）年 1 月提出

## 要旨

本研究の目的は、宮崎県都城市方言における句レベルの韻律構造を分析することである。都城市方言の韻律は語ないし文節レベルにおいて尾高一型と呼ばれるパターンを持つことで知られ、原則として文節の最後の音節に音調の山がくる（平山 1951:267）。しかし、文節の連なった句レベルの韻律に関しては記述に乏しい。本研究で詳しく扱う句レベルの音調パターンについて、明らかにしたことは以下の通りである。

まず、2 つ以上の文節で構成される名詞句に関して、基本的にそれぞれの文節の末尾に音調の山が来る（デフォルトパターン）。次に、見た目は名詞句構造をしていますが、祝日や地名など、全体で1つの語彙素になっている場合は、デフォルトパターンが見られず、それ全体で1つの単語と同じように、全体の末尾の文節にのみ音調の山が来る。第3点目に、ごくわずかながら、上記以外の、すなわち語彙化されていない場合の句構造において、デフォルトパターンではなく、句全体の末尾にのみ音調の山が来る場合もある（五十嵐 2021 の用語に従えばデフレージングが生じる）。第4点目に、焦点化が絡むと、焦点化された語以降の音調の山が全て消えるパターンが生じる（佐藤 2013 に従い、*Minor Phrase* パターンと呼ぶ）。第5点目に、終助詞やコピュラ、テ形＋補助動詞、動詞＋形式名詞など、語彙語＋機能語の構造体において、機能語が韻律語外におかれる。すなわち、語彙語（文節）の末尾に音調の山が生じる。このような音調パターンを韻律語外パターンと呼ぶ。

## 目次

1. はじめに .....	1
2. 対象とする方言 .....	3
2.1. 概要.....	3
2.2. 尾高一型はアクセントなのか.....	4
3. 先行研究 .....	6
3.1. 尾高一型とデフレージング .....	6
3.2. Minor Phrase .....	10
3.3. 先行研究における問題点.....	12
3.3.1. 論点 1：Minor Phrase パターンの分析精緻化.....	12
3.3.2. 論点 2：韻律語外要素.....	13
4. 調査.....	15
4.1. 調査概要.....	15
4.2. 焦点を含む場合.....	16
4.2.1. WH 焦点、WH 応答焦点.....	16
4.2.2. WH 応答焦点（フレーズ内部）・対比焦点.....	17
4.3. 韻律語外パターン.....	20
4.3.1. 終助詞・コピュラ.....	20
4.3.2. 形式名詞.....	21
4.3.3. テ形接続の補助動詞.....	23
4.3.4. その他.....	24
4.3.5. 存現文.....	25
5. おわりに.....	26
参照文献.....	31
付録.....	32

## 1. はじめに

本研究の目的は、宮崎県都城市方言における韻律に焦点を当て、従来あまり注目されてこなかった句・節レベルの様々な構造の韻律パターンを記述することである。

都城市方言の文節レベルの音調は、方言学的に尾高一型と言われ、原則として体言・用言に関わらず「尻上がり一型で、文節の最後の音節に音調の山が来る」（平山 1951: 267）という。ここで、「文節」について、「1つの自立語、またはそれに複数の付属語がついて成り立つ単位」（佐藤 2013: 17）であるとする（文節の定義における問題については結論で再度取り上げる）。(1)に、名詞単独形と助詞をつけた形の音調を例示する。なお、本研究で用いる音調表記は、文献からの引用であっても、上野（2006）の表記法で統一させる。音節間の上昇を[で、音節間の下降を]で、音節間の小幅な下降を!で、音節間の小幅な上昇を%で示す。以降特に注釈がない例文は筆者の作例である。

(1) a. ア[メ、アメ[ガ

「雨・飴」、「雨・飴が」

b. オト[コ、オトコ[モ

「男」、「男も」

[平山 1951: 218]

しかし、文節の連なった句レベルの韻律に関しては記述に乏しい。本研究で詳しく扱う句レベルの音調パターンについて、明らかにしたことを先取りして以下に概観しておく。まず、小林方言など宮崎県の他の尾高一型方言と同様、2つ以上の文節で構成される名詞句に関して、基本的にそれぞれの文節の末尾に音調の山が来ることが分かっている。これを**デフォルトパターン**と呼ぶことにする。

(2) アッタ[カイ]コー[ヒー

「温かいコーヒー」

次に、見た目は名詞句構造をしていますが、祝日や地名など、全体で1つの語彙素になっている場合はデフォルトパターンが見られず、それ自体で1つの単語と同じように、全体の末尾の文節にのみ音調の山が来る。これも平山（1951）によって指摘されていることであり、それを追認した形になる。

(3) シュンブンノ[ヒ

「春分の日」

第3点目に、ごくわずかながら、上記以外の、すなわち明らかに語彙化したと言える場合以外の句構造において、デフォルトパターンではなく、(4)のように、句全体の末尾にのみ音調の山が来る場合もある(3.1節参照)。この現象は、五十嵐(2021)がデフレージング(dephrasing)と呼ぶものであり、「複数の「語」が1つの韻律的な単位に含まれる現象」(五十嵐2021: 30)である。これを**デフレージングパターン**と呼ぶ。

- (4) ハシグチサンノイ[エ]  
「橋口さんの家」

第4点目に、情報構造的な要因が絡むと、デフォルトパターンでもなく、デフレージングでもない韻律パターンが生じうる。以下の(5), (6)に見るように、焦点となっている文節のみに音調の山が生じ、それ以降の一定の区間、文節が低平調となる。

- (5) 「誰がビール飲んだの？」に対して、  
ナオヤ[ガ]ビールノンダダヨ  
「直也がビール飲んだんだよ」

- (6) 「そこに立ってるのって弟さんの娘さん？」に対して、  
イヤ、ワタシ[ノ]ムスメダヨ  
「いや、私の娘だよ」

このような音調パターンは、佐藤(2013)が近隣の小林方言について報告しているパターンと同じものである。佐藤は、1つの文節だけが音調の山を保持し、残りがそれを失うドメインを **Minor Phrase** と呼んでいる。これに倣い、(5), (6)のように、焦点となっている文節以降の音調の山が消えている音調パターンを **Minor Phrase パターン** と呼ぶ。Minor Phrase パターンについては3.2節で詳しく考察し、小林方言のパターンとの異同についても分析する。

第5点目に、語に終助詞やコピュラが後続する場合、(7)のように、語の末尾音節に音調の山が生じる。この現象は、終助詞やコピュラが韻律語外の要素であるために起こると考えられる。このような音調パターンを **韻律語外パターン** と呼ぶ。ただ、佐藤(2013)では同じ現象について異なった分析をしているため、3.3節で詳しく述べる。

- (7) a. コッ[チ]ヨッ[テ]ヨ  
「こっち寄ってよ」

b. セン[セー]ダ

「先生だ」

なお、終助詞やコピュラを含まない文であっても、韻律語外パターンが生じることが新たに判明した（詳しくは 4.3 節参照）。例えば(8)のような、テ+補助動詞の形の句において、補助動詞が音調の山を持たない。テ+補助動詞以外にも、(9)のような S+存在動詞など、述語部分が韻律語外要素になる場合がある。

(8) タベ[テ]ミル  
「食べてみる」

(9) ジショ[ガ]アル  
「辞書がある」

本研究の構成は以下の通りである。2 章で対象とする方言の概略を示し、次に、3 章で、尾高一型に関する先行研究を提示する。4 章では、都城市方言の句・節レベルの尾高一型に関する調査概要・結果について述べる。調査結果は、まず、それぞれの結果について先行研究をもとに、焦点のタイプごとに分けて記述しなおす。次に、文節ごとに音調の山が来ない構造について言及する。5 章では調査から得られたデータを元に本研究のまとめを行い、今後の展開を示す。

## 2. 対象とする方言

### 2.1. 概要

本研究の対象地域は宮崎県都城市である。都城市は宮崎県小林市、宮崎市などと隣接するとともに、鹿児島県との県境に位置し、人口は 158,571 人<sup>1</sup>（2023/1/1 現在）である。

---

<sup>1</sup> 「都城市公式ホームページ」 <https://www.city.miyakonojo.miyazaki.jp/soshiki/12/3845.html>（2023 年 1 月 9 日最終閲覧）

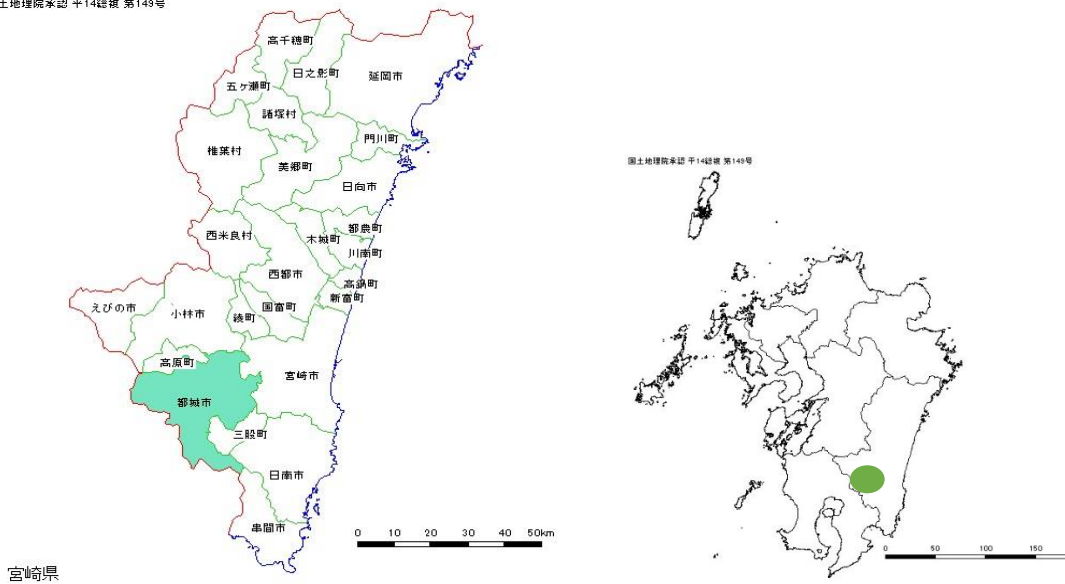


図 1. 宮崎県都城市の地図（緑色ハイライト部分）[KenMap Ver 9.2 を用いて筆者作成]

方言区画は諸県方言の中の、北諸方言に属する。諸県方言の地域は、今日の行政区では宮崎県に属し、同県西南部の北諸県（都城市など）・西諸県（小林市など）の二郡にわたる。

宮崎県内のアクセントには、無アクセント（宮崎式の平板一型。一型知覚がなく、従って高低に固定性がないが、概して平板であるというようなもの（岩本 1991: 246））と、都城式の尾高一型アクセント、A 型と B 型がある鹿児島と同じ九州二型アクセントがある（各アクセントについては 2.2 節で後述）。岩本（1991）によると、宮崎県下のアクセントの分布は、以下の通りである。無アクセントは日向（宮崎市など）のほとんどに全域に及び、東諸県も同様に、北諸県の中にも山之口（現都城市、2006 年に合併）や、西諸県の中にも須木など、広い範囲に分布している。そして、尾高一型アクセントは、都城市・小林市を中心として分布し、二型アクセントは、隣接県の影響を受け、西諸県郡の熊本・鹿児島寄りの地区に分布する。

## 2.2. 尾高一型はアクセントなのか

第 1 章で述べたように、尾高一型の音調パターンは、文節の最終音節に音調の山が来る型であることが特徴である。この尾高一型パターンを「アクセント」と呼ぶ研究が、とりわけ伝統的な方言研究に多い。

上野（1984）では、尾高一型を、「N 型アクセント」の一種だとしている。N 型アクセントとは、「アクセント単位の長さが増えても、対立数が一定数（N）以上に増えていかない体系」（上野 2012: 45）である。これに対して、「アクセント単位の長さに応じて対立数が増えていく体系」を「多型アクセント」と呼んでいる。多型アクセントの代表だとさ

れている東京方言は、拍数を  $n$ 、アクセント型の対立数を  $P$  とすれば、 $Pn=n+1$  と表わされるとし、この方式で示すと、 $N$  型アクセントは  $Pn=N$  の体系となると説明している。この  $n$  に 1 を代入した体系が尾高一型（一型アクセント）である。

一方で、尾高一型のような  $N$  型アクセントを声調の一種であるとする研究もある。早田（1999: 25）では、東京方言のような語のどこにアクセントが来るかという「位置」が重要になるアクセントとは違い、鹿児島市方言などに見られる、語がどのアクセントを持つかという「種類」が重要になるアクセントは、厳密にはアクセントとは言わないほうが適当だとしている。そして、「種類」が問題になるアクセントの代表例として、中国語の「声調」を挙げ、東京方言や博多方言のような「位置」が問題になるアクセントを「（狭義の）アクセント」、鹿児島方言のような「種類」が問題になるアクセントを「声調（トーン）」と呼ぶ。鹿児島方言のような（2種類）単語単位の（表面的には句単位の）○種類の声調を持っている単語単位の声調を、早田は「語声調」、北京語の声調などは「音節声調」としている。鹿児島方言(10)を例にとれば、何音節の単語についても 2 通りの型が区別されるだけである（声調で考えると、二声と言える）。

(10) A 型            [ハ]ナ、ハ[ナ]ガ、ハナ[カ]ラ  
                      「鼻」、「鼻が」、「鼻から」

                      B 型            ハ[ナ、ハナ[ガ、ハナ[カラ  
                      「花」、「花が」、「花から」

[早田 1999: 194]

以上の記述を踏まえると、語全体のパターンとして音調がただ 1 つに決まる尾高一型は、語のどこにアクセントが来るかという「位置」が重要になるアクセント（すなわち文節末音節が高いアクセント）と見ることも可能である一方、語がどの語がどのトーンを持つかという「種類」が重要になるもの（すなわち尾高型の 1 種類の語声調）と見ることもできる。上野は前者、早田は後者の立場であるということである。厳密に考えれば、アクセントと見た場合、尾高一型はアクセントが「どこに有るか」について他の対立する位置を持たないので、アクセントの定義に矛盾する。一方、語声調と見た場合、ただ一種類の声調が全ての語彙に指定されていて、それが実現する際に文節末の一際高い音調の山となって生じると解釈できる。本研究では早田の提案に従い、「（語）声調」とする立場をとる。

上記の語・文節レベルの音調とは別に、例えば質問する際はどんな単語も基本最後で音を上げるというような、「単語とは無関係の音調の高さの動き」（郡 2020: 6）であるイントネーションも重要である。ここで郡のいう「単語」とは、尾高一型でいう「文節」である。本研究で、尾高一型の句レベルの韻律を記述するにあたり、文末に疑問文や確認要求など「末尾のイントネーション」（郡 2020: 135）が確認される場合がある。特に、語＋終



助詞が文末に来るとき、後述するように終助詞は韻律語外におかれ、すなわち基底では低ピッチで実現するが、イントネーションによって高ピッチや上昇ピッチが見られる場合がある。郡（2020）が、「終助詞類は、高さの動きをさまざまに変えることで、話し手が伝えたい気持ちのニュアンスを変えることができる。」と述べている通りである。その場合、尾高一型と末尾のイントネーションでは性質が異なるため、1章で紹介した上野（2006）での表記法とは別に、郡（2020）での末尾のイントネーションの表記を用いる。答えを求める・反応を求める疑問型上昇調を $\uparrow$ 、わかってほしいという気持ちを込める強調型上昇調を $\uparrow$ で示す（郡 2020: 137 表 5-1）。

(11) a. ドコ[デ]ナオヤハビールオノンダ $\uparrow$ ノ？

「どこで直也はビールを飲んだの？」

b. イザカヤ[デ]ノンダ $\uparrow$ ンダッテ $\uparrow$ ヨ

「((11a)に対する返答として) 居酒屋で飲んだんだってよ」

### 3. 先行研究

本章では、尾高一型方言の句レベルの韻律パターンの記述において特に重要な2つの理論的概念を取り上げる。すなわち、デフレージング（五十嵐 2021）と、Minor Phrase 形成（佐藤 2013）である。これらを実際に都城市方言の記述に取り入れる際の記述上の新規な注目点、問題点についても述べ、本研究の記述の論点をまとめる。

#### 3.1. 尾高一型とデフレージング

尾高一型を含む、いわゆる N 型アクセントの方言は、デフレージングと呼ばれる現象が起こりにくいとされてきた。デフレージングとは、複数の「語」が1つの韻律的な単位に含まれる現象(2つ以上の文節が1つのアクセント句に含まれる過程)を指す(五十嵐 2021)。都城方言で最終音節に音調の山が現れる韻律単位（すなわち文節）はここでいうアクセント句に相当する。アクセント句は(12)のように定義される。ここでの「音調によって区別される」とは、ある一定の形状を持ったピッチパターンによって単位の一体性と単位境界が表示されるという意味である。

(12) アクセント句：文節の直上に位置し、音調によって区別された韻律的単位

[五十嵐 2021: 33(4)]

五十嵐（2021）では、表 1 の条件が全て満たされた場合、デフレージングが生じたとみ

なす、としている。以下に例を挙げて説明する。( ) φ はアクセント句を表す。

表 1. デフレージングの有無の判断基準 (五十嵐 2021: 34(5))

a. 文節と文節の間の境界がピッチによって示されない。
b. 複数の文節に被さるピッチ曲線が 1 つの文節に被さるものとその形状が同一である。
c. 複数の文節に被さるピッチ曲線を、それぞれの文節に被さるピッチ曲線が連結した結果とみなすことができない。

(13) a. améó 「飴を」 moráú 「貰う」 → (améó moráú) φ 「飴を貰う」

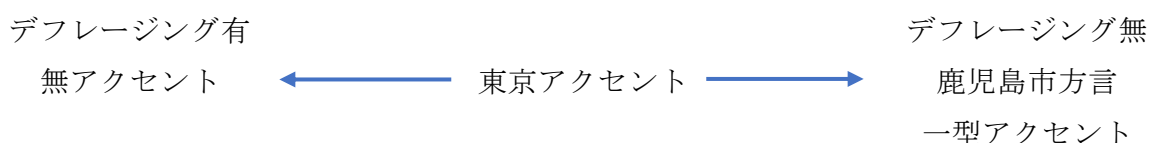
b. mijágémónójá 「土産物屋」 [五十嵐 2021: 35(7)]

(13a)は、「飴を」と「貰う」の2つの文節で構成され、東京方言では、améó「飴を」と moráú「貰う」はそれぞれ文節で上昇調のピッチを持つが、(améó moráú) φ 「飴を貰う」となると、一つのアクセント句になり、デフレージングが生じているといえることができる。逆に、都城方言では améó「飴を」と moráú「貰う」の2つの文節で構成され、どちらも末尾に音調の山が来て、(améó) φ (moráú) φ 「飴を貰う」となって、一つのアクセント句にはならず、デフレージングが生じていないといえることができる。

また、(13a)は、2つの文節が発話を構成し、かつデフレージングが生じた場合、2番目の文節の冒頭のピッチ上昇は観察されなくなり、発話全体のピッチ曲線は、同一のモーラ数を持つ1つの文節、例えば(13b)に被さるピッチ曲線と形の上で同一である(五十嵐 2021: 35)。

五十嵐(2021)は、デフレージングが起こりづらいとされる鹿児島市方言や一型アクセント方言に対して、「無アクセント方言のデフレージングは、はるかに広範な環境で生じる。東京方言でも、デフレージングが生じるが、無核語が先行する場合に限られるという制約がある。」(五十嵐 2021: 3)ことを述べ、一型アクセント方言(本研究で扱う都城市方言を含む尾高一型)や鹿児島市方言などを一方の極に、無アクセント方言を他方の極に置くような、デフレージングの連続体の存在(表2)が示唆された。

表 2. デフレージングの連続的なパラメーター (五十嵐 2021 の記述をもとに筆者作成)



この一般化における都城市方言（一型アクセント）ではデフレージングが最も起こりにくいと予測される。都城市方言において実際はどうかを考える際、表現の語彙化という問題が重要である。

五十嵐（2021: 40）は、「語源的には統語的な句ではあるが、共時的にはすでに語彙化され1語になったものと解釈できる余地が残る」ものはデフレージングに含めないとしている。この点において、都城市方言では祝日(14)や地名などの固有名詞で、全体で1つの語彙素になっている場合は、それ自体で1つの単語と同様に、全体の末尾の文節にのみ音調の山が来るが、これはデフレージングではないということになる。

- (14) シュンブンノ[ヒ  
「春分の日」

なお、語彙化の結果1語になったものか、生産的な句であるかは、語と語の間に何か別の語が挟めるかというテストで確かめることができる。(15)のような祝日の例は、「その」を挟むと意味が通らなくなり、不自然になるため、語彙化の結果1語になったものであると考えられる。対して(16)は、「その」を挟んでも意味が通るため、生産的な句であり、1語になったものではないと考えることができる。

- (15) 体育の日（祝日）  
\*体育のその日

- (16) 体育の授業  
体育のその授業

上記に照らして、語彙化されているかどうか判定が難しいごくわずかな例で、五十嵐が挙げたデフレージングの条件を満たす例が見つかった。

- (17) 「明日どこ行くの？」に対して、  
ハシグチサンノイ[エ]ダノヨ  
「橋口さんの家だよ」

- (18) 「学校の正門にあるのってなんだっけ？」に対して、  
カキノ[キ]ダノヨ  
「柿の木だよ」

(17), (18)ともに、属格「の」と主要部名詞の間に「その」を挟むことは不可能ではない(少なくとも、「体育の日」に比べれば容認度は高い)。文節と文節の間(「の」)に高いピッチが来ていないため、2つの文節の境界が示されない(表 1-a を満たす)。また、尾高一型においては、デフレージングが生じていない場合、単一の文節に被さるピッチ曲線は、末尾の音節に必ずピッチ上昇がある。よって、それぞれの文節に被さるピッチが単純に連結した場合は、文節間にピッチの上昇が見られるはずだが、(17), (18)ともにそれが見られない。よって、これらは個々の文節に被さるピッチ曲線が単純に連結した結果と見なすことができない(表 1-c を満たす)。さらに、(19)のように、2つの文節が連結したときのピッチ曲線が、同一の音節数を持つ1つの文節に被さるピッチ曲線と形の上で同一であるため(表 1-b を満たす)、表 1 の条件を全て満たし、デフレージングが生じたと見なすことができる。

(19) a. カキノ[キ  
「柿の木」

b. コワシ[タ  
「壊した」

上記から、五十嵐(2021)の分類では最もデフレージングが生じにくいとされる方言でも一部でデフレージングが生じる可能性があることということになる。ただし、これらは総じてある程度習慣化された表現(すなわちコロケーション)であり、完全に生産的な句とも異なる。実際、以下のように、デフレージングと思しき、(20a)の「家」を(20b)で「庭」に変えるとデフォルトパターンになる。

(20) a. 「明日どこ行くの？」に対して、  
ハシグチサンノイ[エ]ダノヨ  
「橋口さんの家だよ」

b. 「ここに写ってるの何？」に対して、  
ハシグチサン[ノ]ニ[ワ]ダノヨ  
「橋口さんの庭だよ」

「〇〇の家」を縮約した、同じ意味の「〇〇んち」で調査した結果、(21)のようにひとまとまりの表現となり、末尾のみに音調の山が来る。よって、「〇〇の家」という表現にはある程度の固定表現化(語彙化)が認められると言える。

- (21) 「明日どこ行くの？」に対して、  
ハシグチサン[チ]ダヲヨ  
「橋口さんちだよ」

(22)の「柿の木」という表現も同様にある程度の語彙化が認められる。一見生産的な句ではあるが、「カキノキ<sup>2</sup>」で「クスノキ」や「ヒノキ」などと同様に、一種の植物の名前として固定表現になっている。

- (22) 「学校の正門にあるのってなんだっけ？」に対して、  
カキノ[キ]ダヲヨ  
「柿の木だよ」

本研究では語彙化を程度問題と見なし、完全に語彙化した「体育の日」のような例はデフレージングとしない一方で、語彙化がある程度認められる「〇〇の家」「柿の木」のような例に限ってデフレージングが見られると分析しておく。より厳しい見方をして、これらの例は「体育の日」などと同様に完全に語彙化されたものだと見なせば、デフレージングは全く認められないと言える。いずれの見方を取るにせよ、五十嵐の指摘する通り、一型アクセント方言である都城市方言においてデフレージングはほとんど（あるいは全く）生じないと言える。

### 3.2. Minor Phrase

佐藤（2013）では、都城市方言と同じ、尾高一型アクセントを持つ小林市方言について、焦点を含む文におけるピッチパターンがどのような規則によって現れるのかについて記述している。佐藤（2013: 128）では、小林方言においては「「最大一つの H トーンが実現する」範囲を Minor Phrase と呼ぶことにする」とし、焦点を含む文における Minor Phrase は(23)の規則によって形成されると提案している。

- (23) Minor Phrase 形成規則： [+wh]や[+foc]を持つ要素から、それを束縛する補文標識までで、一つの Minor Phrase を形成せよ。  
[佐藤 2013: 139(47)]

次に、Minor Phrase に適用される規則として、H トーン削除規則を提案している。この規則が Minor Phrase に適用されることによって、ピッチの上昇が生じないという現象が導

---

<sup>2</sup> 学術上の植物名で、「柿の木」はカタカナ表記「カキノキ」とされている。

かれる。

(24) H トーン削除規則：Minor Phrase 内で、初頭の H トーン以外の H トーンをすべて削除せよ。 [佐藤 2013: 129(24)]

下の例は Minor Phrase 内に複数の韻律語 (Prosodic Word=pw) が含まれた場合に、「H トーン削除規則」がどのように適用されるか表している。

(25) ( (α) pw (β) pw (γ) pw) mip  
          |          |×          |×  
          H          H          H [佐藤 2013: 129(25)]

それぞれの韻律語 α, β, γ の最後の音節に H トーンが連結されているが、H トーン削除規則によって、最初の H トーン、すなわち α にある H トーン以外は削除される。実際の発話の例を当てはめると次のようになる。

(26) ダイ[ガ]ビールノンダトケ (誰がビール飲んだの?)  
          ( (ダイガ) pw (ビール) pw (ノンダ) pw トケ) mip  
          |                          |×          |×  
          H                          H          H [佐藤 2013: 129(26)]

(26)のような、疑問詞を含む文では、疑問詞からそれを束縛する補文標識までが一つの Minor Phrase を形成する。よって、その Minor Phrase 内では疑問詞から成る韻律語の末尾にある H トーンが最も左の H トーンとなる。これに「H トーン削除規則」が適用されると、それ以外の H トーン、すなわち、疑問詞より後ろにある H トーンが削除される。また、佐藤 (2013: 152) によると、「この現象は、疑問のスコープによってどこまで続くかが異なる。疑問のスコープが文全体である直接疑問文では、文末まで続く。一方、疑問詞のスコープが埋め込み文である間接疑問文では、埋め込み節末まで続く」と述べられている。

(27b)のように、疑問詞疑問文への応答 (WH 応答、Shimoji 2018 の用語に基づく) の焦点文節でも疑問詞を含む文と同様のピッチパターンが観察される。Minor Phrase が形成され、H トーン削除規則が適用されている。

(27) a. 疑問文  
          ダイ[ガ]ビールノンダトケ

「誰がビール飲んだの？」

b. 応答文

ナオヤ[ガ]ビールノンダッジャイヨ

「((27a)に対する返答として) 直也がビール飲んだんだよ」

[佐藤 2013: 139(45)]

### 3.3. 先行研究における問題点

#### 3.3.1. 論点 1 : Minor Phrase パターンの分析精緻化

都城市方言の尾高一型における、句・節レベルの音調については 1 章で述べたとおり、デフォルトパターン、デフレージングパターン、Minor Phrase パターン、韻律語外パターンの発話が観察される。デフォルトパターンについては、これまでの先行研究で広く述べられてきた、文節の末尾ごとに音調の山が来るピッチパターンであり、特に論点にならない。デフレージングパターンについての論点はすでに 3.1 節で述べた通り、語彙化を程度問題として見なすかどうかにより、このパターンを認めるかどうかが変わる。

Minor Phrase パターンは、デフォルトパターンでもなく、デフレージングパターンでもない第 3 のパターンであり、しかもこれは佐藤 (2013) が近隣の小林市方言について明らかにしたものと同種のものとして捉えることができるため、この用語を採用している。実際(27)で見た疑問詞疑問文の韻律パターンは、佐藤の一般化で説明できる。しかし、佐藤 (2013) の Minor Phrase に関する一般化だけでは説明できないことも筆者の予備調査で明らかとなっている。

まず、焦点を含む文でも、(28)のような、修飾部まで含めて 2 文節全体が焦点になる (WH 応答) 場合、佐藤の一般化では、a のパターン (どちらの文節もそれぞれ H トーンを保持するパターン) と b のパターン (焦点句の左端にある修飾要素だけが H トーンを保持するパターン) のいずれかが期待されるかわからない。実際には、a のパターンが観察される。

(28) 「何がそこに置いてあるの？」に対して、

a. シ[ロイ]マフラー[ガ]オイテアル

b. \*シ[ロイ]マフラーガオイテアル

「白いマフラーが置いてある」

また、焦点を含む文によって、Minor Phrase が形成されることは述べられているが、焦点のタイプごとでの記述が不十分である。焦点の分類については、Shimoji (2018) での記述を用いる。Shimoji (2018) では、焦点を以下の 3 つのタイプに分類している。

(29) a. WH 焦点 : WH 疑問文における、WH フレーズが持つ焦点

b. WH 応答焦点 : WH 疑問文に対する応答部分に付く焦点

c. 対比焦点 : 間違った情報 (Y) を否定し、正しい情報 (X) を特定したときの、(X) 部分に付く焦点 (Y ではなく、X である)

そして、この3つの焦点タイプは、少なくとも琉球諸語の焦点助詞の出現のしやすさに関わっており、対比焦点 > WH 応答焦点 > WH 焦点の順に出現しやすいことが分かっている。ここで、Minor Phrase 形成を一種の焦点表示の手段だと考えると、この階層が Minor Phrase 形成にどう関与するのかが関心の対処になる。佐藤 (2013) の記述からは、小林方言の Minor Phrase 形成は WH 焦点と WH 応答焦点において実現することが分かっている。Shimoji (2018) の焦点階層から考えると、最も焦点標識が実現するとされる対比焦点も、Minor Phrase を形成することが予測されるが、先行研究には記述がないため、網羅的に調査し焦点のタイプごとに記述する必要がある。

### 3.3.2. 論点 2 : 韻律語外要素

佐藤が提案した Minor Phrase 形成は焦点化を動機としたものであった。これと外形上、極めて類似したパターンが存在する。例えば、名詞+コピュラの構造や述語+終助詞の構造がある。以下に見るように、これらは H トーンが全体で1つだけ生じるドメインを形成している。

(30) a. 名詞+コピュラ

セン[セイ]ダ

「先生だ」

b. 述語+終助詞

ヨッ[テ]ヨ

「寄ってよ」

これらを、Minor Phrase パターンとは別種の独立したパターンとして一括できるかが論点となる。佐藤は名詞+コピュラについて、「コピュラがフォーカスでないために、H トーンが削除されている」とし、Minor Phrase 形成によって説明を試みている。その根拠として、(31)に示すようにコピュラが単独で韻律語を形成しうることを挙げている。



(31) a. コピュラが後続する場合  
(ビンタ) pw (ジャ) pw  
「頭だ」

[佐藤 2013: 32(39a)]

b. コピュラで始まる場合  
(ジャ) pw ガ  
「そうだよ (強調)」

[佐藤 2013: 33(40a)]

確かに、(31a)のような通常のコピュラ文において、単にテンスや肯否を担うコピュラに焦点が置かれることは構造上あり得ない。しかし、名詞+コピュラ構造におけるコピュラに対して焦点化が生じていないから、H トーンが削除されている、という分析が正しければ、仮に、コピュラに焦点が置かれる情報構造的な条件を整えれば、H トーンが復活するはずである。ところが、筆者の予備調査の結果、コピュラをあえて焦点化する文脈を設定しても、コピュラにH トーンが生じないことがわかっている。

(32) セン[セイ]ナノ? セン[セイ]ダッタノ?  
「先生なの? 先生だったの?」

この問題に加えて、佐藤が提案するように(31b)をコピュラとみなすのは、「名詞と名詞をつなぐ」というコピュラの定義に反するという素朴な問題がある。むしろ、(31b)は接続詞として自立語の地位を得ていると見ても良さそうである。言い換えれば(31a)と(31b)の違いは、「ジャ」が語として自立しているかどうかであって、(31a)でコピュラに焦点がないという想定は不要であるといえる。

既に述べたように、終助詞の場合もコピュラと同様に、H トーンは終助詞の直前の音節に生じる。これは佐藤 (2013) の記述する小林市方言でも同様である。

(33) a. ビン[タ]ケ  
「頭か」

b. ビン[タ]ヨ  
「頭よ」

[佐藤 2013: 34(24)]

佐藤 (2013) は、終助詞はコピュラと異なり機能語であるとし、他の助詞と異なり例外的に「その直前に韻律語の右境界を要求する要素である」(佐藤 2013: 34) と述べている。このように、佐藤は、韻律語外パターンとして類似する名詞+コピュラ構造と述語+終助詞

構造について異なった分析を示している。前者のみを **Minor Phrase** 形成に組み込み、そうするためにコンピュータは焦点化されないという（正当化されない）主張をおこなっている。

名詞+コンピュータ構造、述語+終助詞構造について、佐藤の分析をまとめると以下のようになる。

(34) 名詞+コンピュータの韻律パターンに関する分析案  
コンピュータに焦点は置かれなため、H トーンが消えている。

(35) 述語+終助詞の韻律パターンに関する分析案  
終助詞は韻律語外に置かれる。

本研究では、名詞+コンピュータ構造や述語+終助詞構造はもとより、さまざまな構造を調べることで、最終的にこれらが(35)のように韻律語外要素という観点で一括してパターン化できることを主張する。名詞+コンピュータを例にすると、コンピュータは韻律語外要素であり、よってH トーンはそもそも生じ得ないということになる。この点でコンピュータは終助詞と同じである。のちに示すように、都城市方言には韻律語外要素が多岐に渡り、その全てが機能語で、かつ多くは文法化した結果であると見ることができる。

## 4. 調査

### 4.1. 調査概要

本研究では、2022年8月から12月の間に筆者が行った、質問票調査で収集したデータを用いる。質問票作成に際し、先行研究でも挙げた、平山（1951）、佐藤（2013）、五十嵐（2021）の調査例文と、益岡・田窪（1992）に掲載されている例文や、それらに適宜修正を加えた例文を用いた。これらの例文を用いる場合、引用先の例文番号も示している。これらに加え、筆者による作例も用いる。以下が話者の詳細である。本研究で用いる調査結果について、どちらか片方のみの結果である場合、60代女性の結果を①、20代男性の結果を②として記述する。

表 3. 話者情報

話者	①YR 氏	②OY 氏
性別	女性	男性
年齢	60代	20代
外住歴	なし	3年（福岡）
調査形式	質問調査	質問調査

## 4.2. 焦点を含む場合

### 4.2.1. WH 焦点、WH 応答焦点

疑問詞を含む文(36a)については、都城方言の尾高一型においても、佐藤(2013)の通り、疑問詞の末尾に高いピッチが来て、その後の文節の末尾に付くはずの高いピッチは無い。これは、疑問詞からそれを束縛する補文標識までで一つの **Minor Phrase** を形成し、疑問詞以外の語に付くはずの高いピッチが **H** トーン削除規則によって削除されているからだと考えられる。

(36b)は、(36a)の疑問文に応答した文である。これは **WH** 応答焦点であり、**WH** に対する答えの部分に焦点がかかり、それ以降の語に高いピッチが生じていない。

#### (36) a. WH 焦点

ダレ[ガ]ビールノンダノ？

「誰がビール飲んだの？」

[佐藤 2013: 138(45a)]

#### b. WH 応答焦点

ナオヤ[ガ]ビールノンダンダヨ

「((36a)に対する返答として) 直也がビール飲んだんだよ」

[佐藤 2013: 138(45b)]

(37)のように、疑問詞の位置を変えた場合、疑問詞より前の文節には高いピッチが残っているが、疑問詞以降の文節には高いピッチが来ていない。

#### (37) WH 焦点 (語順交代)

ビー[ル]ダレ[ガ]ノンダノ？

「ビール誰が飲んだの？」

末尾の「ノ？」に高いピッチが来ているが、本来尾高一型では、終助詞が後続する場合は、終助詞に高いピッチは来ず、その直前の文節の末尾に高いピッチが実現する。よって、「ノ」の前の「ノン[ダ]」に高いピッチが来るはずであるが、**H** トーン削除規則が適用され、高いピッチは消え、「ノ」に末尾のイントネーションが実現し、高いピッチになったと考えられる。

さらに、(38)などから疑問詞の種類によって、高いピッチが来る位置が変化することはないことが分かった。

(38) a. ナニ[オ]ナオヤワノンダノ？  
「何を直也は飲んだの？」

b. ビー[ル]ノンダダヨ  
「((38a)に対する返答として) ビール飲んだんだよ」

以上の結果から、都城方言の尾高一型においても、佐藤（2013）の小林方言の記述と同様に、WH 焦点（疑問詞を含む文）、WH 応答焦点（フォーカスを含む文）両方で、H トーン削除規則が適用され、疑問詞、応答部分以降には高いピッチが生じないことが分かった。

#### 4.2.2. WH 応答焦点（フレーズ内部）・対比焦点

都城方言の尾高一型でも、佐藤（2013）の記述通り、焦点を含む文において、焦点部分以降に高いピッチが生じないということが分かった。次に、その焦点がかかる部分に修飾部がついて、2 文節以上になる場合について調査した。

(39)は「何が」という WH に対する応答部分である、「白いマフラー」は「マフラー」に「白い」という修飾部がついている。この場合は、「白いマフラー（が）」のそれぞれの文節に高いピッチが来て、「置いてある」に本来あるはずの高いピッチが無い。

(39) 「何がそこに置いてあるの？」に対して、  
シ[ロイ]マフラー[ガ]オイテアル  
「白いマフラーが置いてある」

以上のことから、「白いマフラー」という 2 文節のフレーズ全体に WH 応答焦点がかかり、フレーズの内部で Minor Phrase は形成されないことが分かった。これは(40)のように語順を変えて聞いても同じ結果である。

(40) 「そこに置いてあるの何？」に対して、  
シ[ロイ]マフラー[ガ]オイテアル  
「白いマフラーが置いてある」

(41)は「何色の」という WH で、修飾部について聞いている疑問文に対する、WH 応答焦点の結果である。

(41) 「何色のマフラーが置いてあるの？」に対して、

シ[ロイ]マフラーガオイテアル  
「白いマフラーが置いてある」

この場合、色の部分に焦点がかかり、2文節フレーズ内部の「シ[ロイ]」のみに高いピッチがあり、それ以降の語には高いピッチが生じていない。これは、佐藤（2013）の通り、焦点部分からそれを束縛する補文標識までで **Minor Phrase** を形成した後、**H** トーン削除規則が適用された結果だと考えられる。

(42)は「白色の何が」という **WH** で、主要部について聞いている疑問文に対する、**WH** 応答焦点の結果である。

(42) 「白色の何が置いてあるの？」に対して、  
シ[ロイ]マフラー[ガ]オイテアル  
「白いマフラーが置いてある」

この場合、自明な情報である色ではなく、物体そのものの部分に焦点がかかり、「マフラー（が）」に高いピッチがあり、それ以降の語には高いピッチが生じていない。「シロイ」部分については、焦点部分より前に出現する語であるため、高いピッチが生じたままである。これも、佐藤（2013）の通り、焦点部分から **Minor Phrase** が形成された後、**H** トーン削除規則が適用された結果だと考えられる。

(43)は「ベージュのマフラー？」という修飾部を、「白い」と訂正して答えた、対比焦点の結果である。

(43) 「そこに置いてあるのベージュのマフラー？」に対して、  
イ[ヤ、シ[ロイ]マフラーガオイテアル  
「いや、白いマフラーが置いてある」

この場合、訂正する情報である色に焦点がかかり、「シ[ロイ]」のみに高いピッチがあつて、それ以降の語には高いピッチが生じていない。これも、佐藤（2013）の通り、焦点から **Minor Phrase** を形成した後、**H** トーン削除規則が適用された結果である。

(44) 「そこに置いてあるのって白いニット？」に対して、  
イ[ヤ、シ[ロイ]マフ[ラー]ガオイテアル  
「いや、白いマフラーが置いてある」

(44)は「白いニット？」という主要部を、「マフラー」であると訂正した、対比焦点の結

果である。この場合、訂正する情報である物体に焦点がかかって、「マフラー」に高いピッチがあり、それ以降の語には高いピッチが生じていない。「シロイ」については、焦点より前に出現する語であるため、高いピッチが生じたままである。これも、佐藤（2013）の通り、焦点から **Minor Phrase** が形成された後、**H** トーン削除規則が適用された結果である。

以上の焦点を含む文の調査から、今回新たに明らかになったことが2つある。1つ目は、焦点要素が2つ以上の文節からなる場合（**WH** 応答焦点・全体焦点）の **Minor Phrase** 形成についてである。佐藤（2013）の(45) **H** トーン削除規則の図示（再掲）に当てはめると、( $\alpha$ ) の内部が修飾部も付いて ( $\alpha 1$ ) と ( $\alpha 2$ ) の2文節になるパターンである。

(45)		( $\alpha$ ) pw	( $\beta$ ) pw	( $\gamma$ ) pw	mip	
			×	×		
		<b>H</b>	<b>H</b>	<b>H</b>		[佐藤 2013: 129(25)]

今回調査した例文(46)の場合だと、( $\alpha 1$ ) が「白い」、( $\alpha 2$ ) が「マフラー (が)」になる。「白いマフラー (が)」内部の「白い」と「マフラー」はそれぞれ **H** トーンを持つ。「白い」が **H** トーンを持って、「マフラー (が)」の **H** トーンが削除されるということも、その逆もない。「白いマフラー (が)」以降の ( $\beta$ ) に当たる「置いてある」の **H** トーンは削除されている。

- (46) 「何がそこに置いてあるの？」に対して、  
 シ[ロイ]マフラー[ガ]オイテアル  
 「白いマフラーが置いてある」

よって、焦点要素が2文節以上の場合を佐藤（2013）の(45)に適用させると、( $\alpha$ ) 内部の ( $\alpha 1$ ) ( $\alpha 2$ ) はそれぞれ **H** トーンを持つ。( $\alpha 1$ ) が **H** トーンを持って、( $\alpha 2$ ) の **H** トーンが削除されるということも、その逆もない。( $\alpha$ ) 以降（焦点の右側）の ( $\beta$ ) ( $\gamma$ ) に当たる部分の **H** トーンは削除される。よって、焦点要素の主要部以降で **Minor Phrase** を形成するということになる。

2つ目は、対比焦点での **Minor Phrase** 形成についてである。佐藤（2013）は焦点パターンの中でも、対比焦点についての記述がなかったが、今回の調査から、(47), (48)のように焦点部分から **Minor Phrase** が形成され、焦点以降の **H** トーンは削除されることが分かった。

- (47) 「そこに置いてあるのベージュのマフラー？」に対して、

イ[ヤ、シ[ロイ]マフラーガオイテアル  
「いや、白いマフラーが置いてある」

- (48) 「そこに置いてあるのって白いニット？」に対して、  
イ[ヤ、シ[ロイ]マフ[ラー]ガオイテアル  
「いや、白いマフラーが置いてある」

#### 4.3. 韻律語外パターン

次に、焦点を持たない場合で調査を行い、文節の末尾の音調の山が消え、都城方言の尾高一型で韻律語外パターンになった構文を示す。

##### 4.3.1. 終助詞・コピュラ

終助詞は、佐藤（2013）において、機能語で、韻律語外の要素になるものだと説明されている。今回の調査でも(49)のように、終助詞「ヨ」の直前の音節に音調の山が来て、終助詞には高いピッチは無い。

- (49) コッ[チ]ヨッ[テ]ヨ  
「こっち寄ってよ」

コピュラも同様に、(50)のように、コピュラの直前の音節に音調の山が来て、コピュラには高いピッチは無い。

- (50) セン[セー]ダ  
「先生だ」

- (51) セン[セー]ダッタ  
「先生だった」

「コピュラに先行する要素がある場合、コピュラには高いピッチが生じない」（佐藤 2013: 33）という尾高一型の音調規則通り、高いピッチはコピュラの直前の音節に来ていることが確認できた上で、コピュラに関して、佐藤の分析が妥当かどうかを検討するための調査を行った。佐藤はコピュラが名詞に後続したとき、その直前の音節に高いピッチが生じるのは、「コピュラにはもともと高いピッチがあるが、コピュラがフォーカスでないため、H トーン削除規則により、コピュラの H トーンが削除された結果である」と佐藤は述べている。以下の(52)は、佐藤の「コピュラが後続する場合高いピッチが生じないのは、フォー

カスがかかっていないため」という主張をもとに、コピュラに焦点がかかっている文で調査した結果であるが、コピュラに高いピッチが来ないという結果であった。

(52) セン[セー]ナノ？セン[セー]ダッタノ？

(52)のように、コピュラに焦点がかかっているのにも関わらず、コピュラに高いピッチがないことを考えると、「コピュラは語彙語でも韻律語ではない」という主張が認められる。この結果から、焦点の有無に関わらず、コピュラに先行する要素がある場合、コピュラにはそもそも高いピッチが生じず、終助詞と同じく韻律語外の要素になっている、と言える。

#### 4.3.2. 形式名詞

形式名詞とは、「名詞の性質を持ちながら意味的に希薄で、修飾要素なしで使えない名詞」（益岡・田窪 1992: 36）を指す。(53)では「コト」が形式名詞に当たり、単独で文節を構成する要素であるが、その末尾に音調の山が来ない。

(53) a. イ[マ]ダイジナノ[ワ]シュクダイ[オ]オワラセ[ル]コトダヨ

「今大事なのは宿題を終わらせることだよ」

b. ニガテナノ[ワ]ア[サ]ハヤ[ク]オキ[ル]コト

「苦手なのは朝早く起きること」

(54)は、本来的には名詞である「ハズ」に「ダ」が後接した表現である。コピュラの「ダ」に先行する形式名詞「ハズ」には、尾高一型の規則に沿うと、「ハ[ズ]」という音調が見られると予測される。しかし、「ハズ」に高いピッチはなく、「ハイッテ[ル]ハズダ」で韻律語外の要素になるという結果となった。これは、「ハズ」が名詞としての意味を失って、機能語になったために起こった現象であると考えられる。

(54) [モー]ミセ[ニ]ハイッテ[ル]ハズダヨ

「もう店に入ってるはずだよ」

以下の(55b)も、「トコロ」の本来持つ「場所」という意味を失った形式名詞の典型的な例であり、「トコロ」には高いピッチは無くなっている。対して、(55a)は、「トコロ」の名詞性を残しているとされる表現である。しかし、(55b)と同様の結果となり、韻律語外の要素になった。



(55) a. ココ[ワ]ヒコウキ[ガ]トビタ[ツ]トコロダ

「ここは飛行機が飛び立つところだ」

[三宅 2005: 65(14)の例を方言に訳したもの]

b. コレカ[ラ]ヒコウキ[ガ]トビタ[ツ]トコロダ

「これから飛行機が飛び立つところだ」

[三宅 2005: 65(15)]

さらに、上の例と比べると、実質的な意味をより多く残し、完全に形式名詞になっているとは言にくい、類似の機能を持つ名詞が存在する。その条件として「連体部を必須とし、コンピュータを伴って文末に位置し、主語と同値関係でも包含関係でもない名詞」（三宅 2005: 71）であるということを挙げる。同じ名詞でも、(56a)に対して(56b)は助動詞的な性格を持つと分析されている。

(56) a. ソレ[ワ]ミンナ[ニ]シジサレテイ[ル]カンガエダ

「それは皆に支持されている考えだ」

[三宅 2005: 70(43)]

b. カレ[ワ]ジショクス[ル]カンガエダ

「彼は辞職する考えだ」

[三宅 2005: 70(44)]

(55a), (56a)の結果から、本来の名詞としての意味を保持している表現でも、保持していない表現と同じような音調形になった。このことから、本来の名詞としての意味を持つ場合でも、意味を持っていない場合に影響され、(55a), (55b)は、形式名詞になる中間過程段階であるか、中間過程を過ぎ、形式名詞の1つになったために起こったと言えるのではないかと考える。よって、これらは内容語から機能語へ変化して、韻律語外の要素になったと言えることが言える。

(56)の「考え(だ)」のように、本来の意味が希薄になる現象に「文法化」がある。ここで、文法化について説明する。三宅(2005)は、実質的な意味を持ち、自立した要素になり得る語のことを「内容語」と呼び、逆に、実質的な意味、及び自立性が希薄で、主に文法機能を担う要素になる語のことを「機能語」と呼ぶことにし、文法化について、「内容語だったものが、機能語としての性格を持つものに変化する現象」と説明している。また、文法化には、2つの異なった側面が存在するとされている。1つは、実質的な意味が抽象化、希薄化、あるいは消失する、という意味的な側面(漂白化)である。もう1つは、自立性を失い、文法機能を担う要素になる、という形態・統語的な側面(脱範疇化)である。日本語において、内容語は動詞や名詞などに相当し、機能語は助詞、助動詞ということに

なるので、文法化は簡潔に言うと、「動詞や名詞などの語が助詞/助動詞的な機能を有するようになる現象」（三宅 2005: 62）と言い換えることができる。

この説明に照らすと、典型的な形式名詞「こと」「ところ」などは、益岡・田窪（1992）で、「概念や事物を指し示す働きよりも、文の組み立てにおける働きの方が重要」だと述べられているように、文法化が起こっているというより、もともとすでに意味的に希薄な語になっていて、機能語として置いてあるとする方が自然のように思われる。尾高一型では機能語とされる終助詞は、それ自体が音調（韻律）を持っておらず、その直前の要素に音調の山が来る、という規則がある。形式名詞は、「名詞の性質を持ちながら意味的に希薄で、修飾要素なしで使えない名詞」（益岡・田窪 1992: 36）ということを考えて、終助詞と同じ「機能語」の一種として、韻律語外の要素になっていると考えることができる。

ただ、(56)の「考え(だ)」は、完全な形式名詞とは捉えず、文法化の過程における中間段階に位置するとみなされる名詞で、韻律語外の要素になったとする。このような名詞は他に、「種類・性質・感じ・様子・意向・塩梅」（三宅 2005: 71）など多くの例が観察されている。

#### 4.3.3. テ形接続の補助動詞

次に、動詞の「テ形」に、意味を抽象化させた動詞（補助動詞）を後接した表現である。以下に示す調査結果からは、補助動詞は高いピッチを失い「テ」のみに高いピッチが来ることが分かった。

- (57) a. サカナ[オ]タベ[テ]ミル  
「魚を食べてみる」
- b. ヒマダ[シ]テツダッ[テ]アゲル  
「暇だし手伝ってあげる」
- c. スキ[ナ]キョク[オ]ウタッ[テ]クレタ  
「好きな曲を歌ってくれた」

ただ、(58b)のように、補助動詞に焦点がかかった文脈の場合は、補助動詞にも音調の山が生じる場合も認められた。

- (58) a. ヤイ[テ]アゲタノ？ヤイ[テ]モラッタノ？
- b. ヤイ[テ]アゲ[タ]ノ？ヤイ[テ]モラッ[タ]ノ？ (②)

「焼いてあげたの？焼いてもらったの？」

「動詞のテ形＋補助動詞」における補助動詞は、文法化と広く言われるものである。この結果の音調から見ると、補助動詞は文法化により内容語から機能語の一種として意味が希薄化し、韻律語外の要素になった段階であるにとらえることができる。

反対に、「動詞のテ形＋動詞」における動詞は「内容語」であり、文法化は起こっていないと考えられる。ただ、今回の調査結果から、(59)のように、「動詞のテ形＋補助動詞」のときと同じく、後半の動詞にあるはずの高いピッチが消えるという結果も得られた。

(59) a. サカナ[オ]カッ[テ]タベタ (①)

「魚を焼いて食べた」

b. サカナ[オ]ミンナ[デ]スワッ[テ]タベタ (①)

「魚をみんなで座って食べた」

(60) a. カッ[テ]タベタノ？カッ[テ]ノンダノ？ (①)

b. カッ[テ]タベ[タ]ノ？カッ[テ]ノン[ダ]ノ？ (②)

「買って食べたの？買った飲んだの？」

これらの結果から、「動詞のテ形＋動詞」の後半の動詞が、「テ形＋補助動詞」の補助動詞の機能に近づき、韻律語外の要素になって、音調を失いつつあると考えることができる。このことは、文法化について記述している三宅（2005）でも「補助動詞における本動詞性と助動詞性の間には連続体が存在する。」と指摘されている。

#### 4.3.4. その他

複数の語からなる構造体が、ひとまとまりの助詞のような機能を有する場合がある。以下の結果から、明確な助詞「ガ」を挟んでも、そこに高いピッチは来ず、全体としてひとまとまりになり、音調の山が消えている現象が一部で起こった。

(61) a. コレ[ワ]チ[ガウ]カノウセイガアル

「これは違う可能性がある」

[三宅 2005: 72(49)から例文作成]

b. アメ[ガ]フル[ル]オソレガアル (②)

「雨が降る恐れがある」

[三宅 2005: 72(49) から例文作成]

c. アメ[ガ]フ[ル]キガスル

「雨が降る気がする」

[三宅 2005: 72(49)から例文作成]

(61a)「可能性がある」、(61b)「恐れがある」、(61c)「気がする」のような表現も、文法化により「内容語」から「機能語」の一種として、韻律語外の要素になったとする。

以上の調査結果から、尾高一型において、末尾に音調の山が来ず、韻律語外パターンになる構文に共通して見られるのは、佐藤（2013）の終助詞でのピッチ分析と同様に、韻律語外になる要素が機能語のようなものであることが関係しているのではないかと考察する。さらに機能語になる要因としては、文法化により意味が希薄化するからだと考える。

#### 4.3.5. 存現文

存在を表す動詞（c）は、次に示すように、普通の述語（a, b）とは異なり、末尾の高いピッチが消えることが今回明らかになった。

(62) a. ジュギョウ[ガ]ハジマ[ル]

「授業が始まる」

b. ジュギョウ[ガ]オモシ[ロイ]

「授業が面白い」

c. ジュギョウ[ガ]アル

「授業がある」

(63) a. オトート[ガ]ナイ[タ]

「弟が泣いた」

b. オトート[ガ]カワ[イー]

「弟がかわいい」

c. ワタシニ[ワ]オトート[ガ]イル

「私には弟がいる」

さらに、存在動詞とは異なる動詞として、(64)「来る」も同じく韻律語外の要素になった。「来る」は出現を表す動詞として捉える。

- (64) デンシャ[ガ]クル  
「電車が来る」

(65)のような「ない」でも高いピッチが消えることが分かった。これは動詞ではなく、形容詞であるが、主語が「ある」か「ない」を表すという意味で「消失」に関係する表現であると捉えることができる。

- (65) a. サイフ[ガ]ナイ  
「財布がない」

- b. ゲンキ[ガ]ナイ  
「元気がない」

よって、以上のような存在・出現・消失を表す述語は、その他の述語と異なり、特殊なグループとして韻律語外になる要素の1つだと考えられる。

## 5. おわりに

本研究の目的は、宮崎県都城方言の音調である尾高一型について、先行研究の分析を批判的に検討しつつ、新たなデータの提示によって、尾高一型に見られる音調の型の種類、特に末尾の音調が消える現象を詳細に記述することであった。今回は焦点を含む場合とそうでない場合とで調査を行い、焦点を含む文に関しては、佐藤（2013）の *Minor Phrase* という記述を発展させ、焦点のパターンごとに網羅的に記述し直すとともに、焦点部分が修飾部も含み、2文節以上にわたる場合にどうなるかも明らかにした。調査結果からは、おおかた佐藤（2013）の提示する規則通りの音調パターンになることが分かり、加えて、焦点要素が2文節以上にわたる場合の *Minor Phrase* 形成と、対比焦点の場合の *Minor Phrase* 形成について新たに記述することができた。

- (66) 焦点要素が2文節以上にわたる場合  
焦点内部の要素それぞれに高いピッチが生じる。主要部部分から *Minor Phrase* が形成され、焦点内部後半以降の高いピッチが削除される。

- a. 「何がそこに置いてあるの？」に対して、  
シ[ロイ]マフラー[ガ]オイテアル

「白いマフラーが置いてある」

(67) 対比焦点の場合

焦点部分から **Minor Phrase** が形成され、焦点部分以降の高いピッチが削除される。

- a. 「そこに置いてあるのベージュのマフラー？」に対して、

イ[ヤ、シ[ロイ]マフラーガオイテアル

「いや、白いマフラーが置いてある」

- b. 「そこに置いてあるのって白いニット？」に対して、

イ[ヤ、シ[ロイ]マフラー[ガ]オイテアル

「いや、白いマフラーが置いてある」

焦点を含まない文に関しては、本来ある音調の山が消えるのは、該当語が機能語であり、韻律語外の要素になったために起こる現象であることを明らかにした。また、調査結果から、随所で文法化への連続的な変化も見られた。韻律語外の要素になっているものの多くは文法化により、本来の意味を失った語であるが、本来の意味を保持しながらも、韻律語外の要素になっているものもあった。特に、本来の意味を持ったままである構文に関しては、話者に揺れが見られたため、変化しつつある中間段階だと考えることができる。三宅（2005）も「内容語から機能語への変化の過程には、次第に変化するという漸次性が見られる、換言すると、中間段階の存在が認められるとされている。」と述べているため、尾高一型の音調からも同じことを導くことができたと考える。以下に、尾高一型において、韻律語外の要素になると判明した3グループの構文をまとめる。

1 つ目はもともと語彙的な意味が希薄化している語で、韻律語外の要素になっているものである。

(68) 形式名詞

- a. ニガテナノ[ワ]ア[サ]ハヤ[ク]オキ[ル]コト

「苦手なのは朝早く起きること」

- b. [モー]ミセ[ニ]ハイッテ[ル]ハズダヨ

「もう店に入ってるはずだよ」

- c. コレカ[ラ]ヒコウキ[ガ]トビタ[ツ]トコロダ

「これから飛行機が飛び立つところだ」

2 つ目はもともと語彙的な意味を持っていた語が、文法化により意味が希薄化したりして機能語になったものである。

(69) テ形接続の補助動詞

- a. サカナ[オ]タベ[テ]ミル  
「魚を食べてみる」
- b. ヒマダ[シ]テツダッ[テ]アゲル  
「暇だし手伝ってあげる」

(70) テ形接続の動詞

- a. サカナ[オ]カッ[テ]タベタ  
「魚を焼いて食べた」
- b. サカナ[オ]ミンナ[デ]スワッ[テ]タベタ  
「魚をみんなで座って食べた」

(71) その他

- a. コレ[ワ]チ[ガウ]カノーサーガアル  
「これは違う可能性がある」
- b. アメ[ガ]フ[ル]キガスル  
「雨が降る気がする」

3 つ目は、存在・出現・消失を表す述語の場合である。内容語が機能語になったため韻律語外要素になった、という今回の一般化における例外とした。

(72) 存在動詞（存現文）

- a. ジュギョー[ガ]アル  
「授業がある」
- b. デンシャ[ガ]クル  
「電車が来る」

c. サイフ[ガ]ナイ  
「財布がない」

今後の課題としては、以下の2点が挙げられる。1点目は、尾高一型で韻律語外の要素になる表現をいくつか明らかにしたが、その中で存現文のみ、韻律語外になるメカニズムが判明しきれなかった点である。本研究では、ある語が韻律語外になる理由の多くを文法化によるものだ、と結論付けたが、存現文に関しては、考察が不十分なところがあり、文法化によるものだとは断定するまでに至らなかった。他の述語とは異なり、特殊な例であることが今回の調査で判明したため、今後の研究で韻律語外要素になる理由が解明されることが望まれる。

2点目は、「文節」の定義についてである。尾高一型は平山(1951)において、「文節の最後の音節が一音高い」とされるが、そもそも「文節」とは何なのか、さらに言えば、この単位は必要なのかという問題がある。1章で「1つの自立語、またはそれに複数の付属語がついて成り立つ単位」という定義を、本研究で主として扱った佐藤(2013)から(橋本(1959)に基づいている)引用した。しかし、今回の調査結果から、尾高一型において音調の山が来るのは、必ずしもこの定義における文節の末尾ではないことが判明している。例えば、名詞+コピュラや名詞と終助詞は上記の定義における文節であるが、コピュラや終助詞は韻律語外にある。すなわち、「文節」が示す対象と、音調の山が来る対象は、一致することも多いものの、一致しないこともある。「文節」が自立語や付属語といった形態統語的観点から定義され、音調の山が音韻論的な観点から観察されたものであることを踏まえると、両者が示す対象が一致しないという事態が生じることも度々あると考えられる。しかし、これまでの研究では、両者が一致することを前提に議論が進んできたと言える。上野(1984)は、尾高一型は文節末に音調の山が来ることから、「文節末位固定型」で、「文節表示機能」に徹したものとされ、音調によって「それだけでその文節の終わりを明示し、同時に次の文節の始まりも示すことができる」と述べている。こうなると、尾高一型は文節の最後が1音上がるものであるが、文節がどこで切れるかは、音調の山の位置で決まる、という循環論が発生してしまうことになる。

この問題は、結局、語(多くは名詞)に助詞をつけた程度の構造しか考察対象にしてこなかった伝統的な方言研究、とりわけアクセント研究の重大な瑕疵である。これまでは、アクセント(あるいは語声調)のパターンを記述するうえでは文節という用語で問題がなかったのは、「名詞に助詞をつけたもの」より大きな単位を考察対象にしなかったからであって、文節という単位が当該現象の記述において適しているわけではない。本研究が示したように、様々な構造体を対象にして(一般に文節に見られる)音調を分析する際は、名詞+コピュラや名詞+終助詞、テ形+補助動詞など、語彙語+機能語という単位を用いるのが適切だったり、Minor Phrase 形成や存現文など、それでも記述できない場合もある。



文節なる用語を用いずともこれらは適切に記述できるし、逆に文節という用語にこだわっている限り、これらの構造体の記述はできない。結局のところ、考察対象の狭さが生み出した「文節」なる用語は不要である。

## 6. 参照文献

- 橋本進吉（1959）『国文法体系論』東京：岩波書店.
- 早田輝洋（1999）『音調のタイポロジー』東京：大修館書店.
- 平山輝男（1951）『九州方言音調の研究：共通語・京阪語との比較考察』東京：学会之指針社.
- 五十嵐陽介（2021）「日本語諸方言のイントネーションと言語類型論」窪菌晴夫・野田尚史・ブラシャントパルデシ・松本曜（編）『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』22-48. 東京：開拓社.
- 岩本実（1991）「宮崎」九州方言学会（編）『九州方言の基礎的研究』改訂版. 254-253. 東京：風間書房.
- 郡史郎（2020）『日本語のイントネーション—しくみと音読・朗読への応用—』東京：大修館書店.
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法—改訂版—』東京：くろしお出版.
- 三宅知宏（2005）「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって—」『日本語の研究』1(3): 61-75.
- 佐藤久美子（2013）『小林方言とトルコ語のプロソディー—一型アクセント言語の共通点—』九州大学人文学叢書 3. 福岡：九州大学出版会.
- Shimoji, Michinori (2018) Information Structure, Focus, and Focus-Marking Hierarchies in Ryukyuan Languages. *Gengo kenkyu*. 154: 85-121.
- 上野善道（1984）「N型アクセントの一般特性について」平山輝男博士古稀記念会（編）『現代方言学の課題 2 記述的研究篇』167-209. 東京：明治書院.
- 上野善道（2006）「日本語アクセントの再建」『言語研究』130: 1-42.
- 上野善道（2012）「N型アクセントとは何か」『音声研究』16(1): 44-62.

## 7. 付録

以下の表では、調査例文と話者①Y.R 氏と②O.Y 氏の回答の全てを記載する。調査例文の主要部、修飾部に焦点がかかって発話されるようにするために、一部対話形式での調査を行った。また、話者に自然な発話を意識してもらったため、諸所に2名の間で表現が異なる場合もある。

調査協力者2名の音声データについては、以下のリンクから聞くことができる。

[https://drive.google.com/drive/folders/1yMjrxZXtU15piufFrYhTG34uxkjcB4wD?usp=share\\_link](https://drive.google.com/drive/folders/1yMjrxZXtU15piufFrYhTG34uxkjcB4wD?usp=share_link)

[https://drive.google.com/drive/folders/1ku983qV8RsgDYCZFKUte2P17frJDEdYK?usp=share\\_link](https://drive.google.com/drive/folders/1ku983qV8RsgDYCZFKUte2P17frJDEdYK?usp=share_link)

	調査例文	①60代女性	②20代男性
誰が (wh 焦点)	誰がビール飲んだの？	ダレ[ガ]ビールノンダノ？	ダレ[ガ]ビールノンダノ？
誰が (wh 応答焦点)	直也がビール飲んだんだよ	ナオヤ[ガ]ビールノンダノヨ	ナオヤ[ガ]ビールノンダノヨ
誰が (順番交代) (wh 焦点)	ビール誰が飲んだの？	ビー[ル]ダレ[ガ]ノンダノ？	ビー[ル]ダレ[ガ]ノンダノ？
何を (wh 焦点)	何を直也は飲んだの？	ナニ[オ]ナオヤワノンダノ？	ナニ[オ]ナオヤワノンダノ？
何を (wh 応答焦点)	ビールを飲んだんだよ	ビール[オ]ノンダノヨ	ビール[オ]ノンダノヨ
いつ (wh 焦点)	いつ直也はビール飲んだの？	イ[ツ]ナオヤワビールオノンダノ？	イ[ツ]ナオヤワビールノンダノ？
いつ (wh 応答焦点)	先週の金曜に飲んだんだよ	センシュウ[ノ]キンヨー[ニ]ノンダノヨ	センシュウ[ノ]キンヨー[ニ]ノンダノヨ
どこで (wh 焦点)	どこで直也はビール飲んだの？	ドコ[デ]ナオヤワビールオノンダノ？	ドコ[デ]ナオヤワビールノンダノ？
どこで (wh 応答焦点)	居酒屋で飲んだんだよ	イザカヤ[デ]ノンダノヨ	イザカヤ[デ]ノンダノヨ
どうして (wh 焦点)	どうして直也はビール飲んだの？	ドーシ[テ]ナオヤワビールオノンダノ？	ドーシ[テ]ナオヤワビールノンダノ？
どうして (wh 応答焦点)	勧められて飲んだんだよ	ススメラレ[テ]ノンダノヨ	ススメラレ[テ]ノンダノヨ

質問文	回答（調査例文）	60代女性	20代男性
形容詞＋名詞			
白いマフラー			
何がそこに置いてあるの？(WH応答焦点・全体焦点)	白いマフラーが置いてある	シ[ロイ]マフラー[ガ]オイテアル	シ[ロイ]マフラー[ガ]オイテアルヨ
	白いマフラーだよ	シ[ロイ]マフ[ラー]ダノヨ	シ[ロイ]マフ[ラー]ダヨ
そこに置いてあるの何？(WH応答焦点・全体焦点)	白いマフラーが置いてある	シ[ロイ]マフラー[ガ]オイテアル	シ[ロイ]マフラー[ガ]オイテアル
	白いマフラーだよ	シ[ロイ]マフ[ラー]ダノヨ	シ[ロイ]マフ[ラー]ダヨ
何色のマフラーが置いてあるの？(WH応答焦点・修飾部焦点)	白いマフラーが置いてある	シ[ロイ]マフラーガオイテアル	シ[ロイ]マフラーガオイテアル
	白いマフラーだよ	シ[ロイ]マフラーダヨ	シ[ロイ]マフラーダヨ
白色の何が置いてあるの？(WH応答焦点・主要部焦点)	白いマフラーが置いてある	シ[ロイ]マフラー[ガ]オイテアル	シ[ロイ]マフラー[ガ]オイテアル
	白いマフラーだよ	シ[ロイ]マフ[ラー]ダノヨ	シ[ロイ]マフ[ラー]ダヨ
そこに置いてあるのベージュのマフラー？(対比焦点・修飾部焦点)	いや、白いマフラーが置いてある	イ[ヤ、シ[ロイ]マフラーガオイテアル	イ[ヤ、シ[ロイ]マフラーガオイテアル
	白いマフラーだよ	イ[ヤ、シ[ロイ]マフラーダノヨ	イ[ヤ、シ[ロイ]マフ[ラー]ダヨ
そこに置いてあるの白いニット？(対比焦点・主要部焦点)	いや、白いマフラーが置いてある	イ[ヤ、シ[ロイ]マフラー[ガ]オイテアル	イ[ヤ、シ[ロイ]マフラー[ガ]オイテアル
	白いマフラーだよ	イ[ヤ、シ[ロイ]マフ[ラー]ダノヨ	イ[ヤ、シ[ロイ]マフ[ラー]
温かいコーヒー			
その水筒に入っているの何？(WH応答焦点・全体焦点)	温かいコーヒーだよ	アタタ[カイ]コー[ヒー]ダノヨ	アッタ[カイ]コー[ヒー]
その水筒に入っているのって冷たいコーヒー？(WH応答)	いや、温かいコーヒーだよ	イ[ヤ、アタタ[カイ]コー[ヒー]ダノヨ	アッタ[カイ]コーヒー

焦点・修飾部焦点)			
その水筒に入っているのって温かい紅茶？ (WH 応答焦点・主要部焦点)	いや、温かいコーヒーだよ	イ[ヤ、アタタ[カイ]コー[ヒー]ダノヨ	アッタ[カイ]コー[ヒー]ダヨ
形容動詞+名詞			
必要なプリント			
何がこのかばんに入っているの？ (WH 応答焦点・全体焦点)	必要なプリントが入ってる	ヒツヨー[ナ]プリント[ガ]ハイッテル	ヒツヨー[ナ]プリント[ガ]ハイッテル
	必要なプリントだよ	ヒツヨー[ナ]プリント[ト]ダノヨ	ヒツヨー[ナ]プリント[ト]ダヨ
このかばんに入っている何？ (WH 応答焦点・全体焦点)	必要なプリントが入ってる	ヒツヨー[ナ]プリント[ガ]ハイッテル	ヒツヨー[ナ]プリント[ガ]ハイッテルヨ
	必要なプリントだよ	ヒツヨー[ナ]プリント[ト]ダノヨ	ヒツヨー[ナ]プリント[ト]ダヨ
どんなプリントが入っているの？ (WH 応答焦点・修飾部焦点)	必要なプリントが入ってる	ヒツヨー[ナ]プリント[ガ]ハイッテル	ヒツヨー[ナ]プリントガハイッテル
	必要なプリントだよ	ヒツヨー[ナ]プリント[ト]ダヨ	ヒツヨー[ナ]プリントダヨ
明日の会議で必要な何が入っているの？ (WH 応答焦点・主要部焦点)	必要なプリントが入ってる	ヒツヨー[ナ]プリント[ガ]ハイッテル	ヒツヨー[ナ]プリント[ガ]ハイッテル
	必要なプリントだよ	ヒツヨー[ナ]プリント[ト]ダノヨ	ヒツヨー[ナ]プリント[ト]ダヨ
このかばんに入っているのってもう要らないプリント？ (対比焦点・修飾部焦点)	必要なプリントが入ってるよ	イ[ヤ、ヒツヨー[ナ]プリント[ガ]ハイッテル	イ[ヤ、ヒツヨー[ナ]プリントガハイッテル
	必要なプリントだよ	イ[ヤ、ヒツヨー[ナ]プリントダノヨ	イ[ヤ、ヒツヨー[ナ]プリントダヨ
このかばんに入っているのって明日必要なパソコン？ (対比焦点・主要部焦点)	必要なプリントが入ってる	イ[ヤ、ヒツヨー[ナ]プリント[ガ]ハイッテル	イ[ヤ、ヒツヨー[ナ]プリント[ガ]ハイッテル
	必要なプリントだよ	イ[ヤ、ヒツヨー[ナ]プリント[ト]ダノヨ	イ[ヤ、ヒツヨー[ナ]プリント[ト]ダヨ
有名な遊園地			

ディズニーランドってどんなところ？ (WH 応答焦点・全体焦点)	有名な遊園地だよ	ユーマー[ナ]ユーエン[チ]ダヲヨ	ユーマー[ナ]ユーエン[チ]ダヨ
グリーンランドって誰も知らない遊園地だよ？ (対比焦点・修飾部焦点)	いや、有名な遊園地だよ	イ[ヤ、ユーマー[ナ]ユーエン[チ]ダヨ	イ[ヤ、ユーマー[ナ]ユーエン[チ]ダヨ
グリーンランドって有名な植物園だっけ？ (対比焦点・主要部焦点)	いや、有名な遊園地だよ	イ[ヤ、ユーマー[ナ]ユーエン[チ]ダヨ	イ[ヤ、ユーマー[ナ]ユーエン[チ]ダヨ
「A の B」			
明日の会議			
スケジュール帳に印があるけどこれ何？ (WH 応答焦点・全体焦点)	明日の会議だよ	アシタ[ノ]カイ[ギ]ダヲヨ	アシタ[ノ]カイ[ギ]ダヨ
いつの会議の印なの？ (WH 応答焦点・修飾部焦点)	明日の会議の印だよ	アシタ[ノ]カイギノシルシダヲヨ	アシタ[ノ]カイギノシルシダヨ
	明日の会議だよ	アシタ[ノ]カイ[ギ]ダヨ	アシタ[ノ]カイギダヨ
明日の何の印なの？ (WH 応答焦点・修飾部焦点)	明日の会議の印だよ	アシタ[ノ]カイギ[ノ]シルシダヲヨ	アシタ[ノ]カイギ[ノ]シルシダヨ
	明日の会議だよ	アシタ[ノ]カイ[ギ]ダヨ	アシタ[ノ]カイ[ギ]ダヨ
今印付けてるのって明後日の会議？ (対比焦点・修飾部焦点)	明日の会議の印だよ	イ[ヤ、アシタ[ノ]カイギ[ノ]シルシダヨ	アシタ[ノ]カイギノシルシダヨ
	明日の会議だよ	イ[ヤ、アシタ[ノ]カイギダヨ	イ[ヤ、アシタ[ノ]カイギダヨ
今計画立ててるのって明日の歓迎会？ (対比焦点・主	明日の会議の印だよ	アシタ[ノ]カイギ[ノ]シルシダヨ	アシタ[ノ]カイギ[ノ]シルシダヨ
	明日の会議だよ	イヤ、アシタ[ノ]カイ	イ[ヤ、アシタ[ノ]カイ

要部焦点)		[ギ]ダヲヨ	[ギ]ダヨ
柿の木			
学校の正門にあるのってなんだった？ (WH 応答焦点・全体焦点)	柿の木だよ	カキノ[キ]ダヲヨ	カキノ[キ]ダヨ
学校の正門にあるのってイチョウの木だった？ (対比焦点・修飾部焦点)	いや、柿の木だよ	イ[ヤ、カキノ[キ]ダヲヨ	イ[ヤ、カキノ[キ]ダヨ
学校の正門にあるのって柿の木のモニュメントだった？ (対比焦点・主要部焦点)	いや、柿の木だよ	イ[ヤ、カキノ[キ]ダヲヨ	イ[ヤ、カキノ[キ]ダヨ
私の娘			
そこに立っているのって誰？ (WH 応答焦点・全体焦点)	私の娘だよ	ワタシ[ノ]ムス[メ]ダヲヨ	ワタシ[ノ]ムス[メ]ダヨ
そこに立っているのって弟さんの娘さん？ (対比焦点・修飾部焦点)	いや、私の娘だよ	イ[ヤ、ワタシ[ノ]ムス[メ]ダヨ	イ[ヤ、ワタシ[ノ]ムス[メ]ダヨ
そこに立っているのって息子さん？ (対比焦点・主要部焦点)	いや、私の娘だよ	イ[ヤ、ワタシ[ノ]ムス[メ]ダヲヨ	イ[ヤ、ワタシ[ノ]ムス[メ]ダヨ
都井の岬 (地名)			
明日どこ行くの？ (WH 応答焦点・全体焦点)	都井の岬だよ	トイノミサ[キ]ダヲヨ	トイノミサ[キ]ダヨ
明日行くのって佐多の岬だった？ (対比焦点・修飾	いや、都井の岬だよ	イ[ヤ、トイ[ノ]ミサ[キ]ダヨ	イ[ヤ、トイノミサ[キ]ダヨ

部焦点)			
明日行くのって都井の火祭り？（対比焦点・主要部焦点）	いや、都井の岬だよ	イ[ヤ、トイノミサ[キ]ダヲヨ	イ[ヤ、トイノミサ[キ]ダヨ
祝日			
祝日って何があるっけ？	成人の日、建国記念の日、敬老の日、秋分の日、春分の日、スポーツの日	セイジンノ[ヒ]、ケンコクキネン[ビ]、ケーローノ[ヒ]、シューブンノ[ヒ]、シュンブンノ[ヒ]、スポーツノ[ヒ]	セイジンノ[ヒ]、ケンコクキネンノ[ヒ]、ケーローノ[ヒ]、シューブンノ[ヒ]、シュンブンノ[ヒ]、スポーツノ[ヒ]
橋口さんの家			
今からどこ行くの？（WH 応答焦点・全体焦点）	橋口さんの家だよ	ハシグチサンノイ[エ]ダヲヨ	ハシグチサン%ノ]イ[エ]ダヨ
今から山口さんの家行くの？（対比焦点・修飾部焦点）	いや、橋口さんの家だよ	イ[ヤ、ハシグチサンノ]イ[エ]ダヲヨ	イ[ヤ、ハシグチサンノ]イエダヨ
今から橋口さんのお店行くの？（対比焦点・主要部焦点）	いや、橋口さんの家だよ	イ[ヤ、ハシグチサンノ]イ[エ]ダヲヨ	イ[ヤ、ハシグチサン%ノ]イ[エ]ダヨ
橋口さんち			
今からどこ行くの？（WH 応答焦点・全体焦点）	橋口さんちだよ	ハシグチサン[チ]ダヲヨ	ハシグチサン[チ]ダヨ
今から山口さんの家行くの？（対比焦点・修飾部焦点）	いや、橋口さんちだよ	イヤ、ハシグチサン[チ]ダヲヨ	イヤ、ハシグチサン[チ]ダヨ
今から橋口さんの店行くの？（対比焦点・主要部焦点）	いや、橋口さんちだよ	イヤ、ハシグチサン[チ]ダヲヨ	イヤ、ハシグチサン[チ]ダヨ
補足語修飾節			



昨日買ったゲーム			
何を今持っているの？(WH 応答焦点・全体焦点)	昨日買ったゲーム持っている	キ[ノー]カッ[タ]ゲー [ム]モッテル	キ[ノー]カッ[タ]ゲー [ム]モッテル
	昨日買ったゲームだよ	キ[ノー]カッ[タ]ゲー [ム]ダヨ	キ[ノー]カッ[タ]ゲー [ム]ダヨ
今持っているのって何？(WH 応答焦点・全体焦点)	昨日買ったゲーム持っている	キ[ノー]カッ[タ]ゲー [ム]モッテル	キ[ノー]カッ[タ]ゲー [ム]モッテル
	昨日買ったゲームだよ	キ[ノー]カッ[タ]ゲー [ム]ダヨ	キ[ノー]カッ[タ]ゲー [ム]ダヨ
どうやって手に入れたゲーム持っているの？(WH 応答焦点・修飾部焦点)	昨日買ったゲーム持っている	キ[ノー]カッ[タ]ゲー ムモッテル	キ[ノー]カッ[タ]ゲー -%ム]モッテル
	昨日買ったゲームだよ	キ[ノー]カッ[タ]ゲー ムダヨ	キ[ノー]カッ[タ]ゲー ムダヨ
昨日買った何を持っているの？(WH 応答焦点・修飾部焦点)	昨日買ったゲーム持っている	キ[ノー]カッ[タ]ゲー [ム]モッテル	キ[ノー]カッ[タ]ゲー [ム]モッテル
	昨日買ったゲームだよ	キ[ノー]カッ[タ]ゲー [ム]ダヨ	キ[ノー]カッ[タ]ゲー [ム]ダヨ
今持っているのって昨日借りたゲーム？(対比焦点・修飾部焦点)	昨日買ったゲーム持っている	イ[ヤ、キ[ノー]カッ [タ]ゲームモッテル	イ[ヤ、キ[ノー]カッ [タ]ゲームモッテル
	いや、昨日買ったゲームだよ	イ[ヤ、キ[ノー]カッ [タ]ゲームダヨ	イ[ヤ、キ[ノー]カッ [タ]ゲームダヨ
今持っているのって昨日買ったDVD？(対比焦点・主要部焦点)	昨日買ったゲーム持っている	イ[ヤ、キ[ノー]カッ [タ]ゲー[ム]モッテル	イ[ヤ、キ[ノー]カッ [タ]ゲー[ム]モッテル
	いや、昨日買ったゲームだよ	イ[ヤ、キ[ノー]カッ [タ]ゲー[ム]ダヨ	イ[ヤ、キ[ノー]カッ [タ]ゲー[ム]ダヨ
公園を走ってる男			
何を見てるの？(WH 応答焦点・全体焦点)	走ってる男だよ	ハシッテ[ル]オト[コ] ダヨ	ハシッテ[ル]オト[コ] ダヨ
昨日見たのって公園を歩いている男性だけ？(対比焦点・修飾部焦点)	いや、走ってる男だよ	イ[ヤ、ハシッテ[ル]オ トコダヨ	イ[ヤ、ハシッテ[ル]オ ト[コ]ダヨ
昨日見たのって公	いや、走ってる男	イ[ヤ、ハシッテ[ル]オ	イ[ヤ、ハシッテ[ル]オ

園を走ってる女性 だっけ？（対比焦 点・主要部焦点）	だよ	ト[コ]ダノヨ	ト[コ]ダヨ
相対名詞修飾節			
右側			
お店ってどこ？ （WH 応答焦点・全 体焦点）	道を渡った右側だ よ	ミチ[オ]ワタッ[タ]ミ ギガ[ワ]ダノヨ	ミチ[オ]ワタッ[タ]ミ ギガ[ワ]ダヨ
お店の場所ってこ この右側？（対比 焦点・修飾部焦点）	いや、道を渡った 右側だよ	イ[ヤ、ミチ[オ]ワタッ [タ]ミギガ%ワ]ダノヨ	イ[ヤ、ミチ[オ]ワタッ [タ]ミギガ%ワ]
お店の場所って道 を渡った左側？ （対比焦点・主要 部焦点）	いや、道を渡った 右側だよ	イ[ヤ、ミチ[オ]ワタッ [タ]ミギガ[ワ]ダノヨ	イ[ヤ、ミチ[オ]ワタッ [タ]ミギガ[ワ]ダヨ
内容節			
におい			
嫌いなものってあ る？（WH 応答焦 点・全体焦点）	魚が焦げたにおい だよ	サカナ[ガ]コゲ[タ]ニ [オイ]ダノヨ	サカナ[ガ]コゲ%タ] ニ[オイ]ダヨ
嫌いなものって、 魚の生臭い匂い？ （対比焦点・修飾 部焦点）	いや、魚が焦げた においだよ	イ[ヤ、サカナ[ガ]コゲ [タ]ニオイ]ダヨ	イ[ヤ、サカナ[ガ]コゲ [タ]ニオイ]ダヨ
嫌いなものって魚 が焦げた音？（対 比焦点・主要部焦 点）	いや、魚が焦げた においだよ	イ[ヤ、サカナ[ガ]コ ゲ%タ]ニ[オイ]ダヨ	イ[ヤ、サカナ[ガ]コゲ [タ]ニ[オイ]ダヨ
終助詞・コピュラ			
	一回こっち寄って よ	イッ[カイ]コッ[チ]ヨ ッ[テ]ヨ	イッ[カイ]コッ[チ]ヨ ッ[テ]ヨ
	先生だ	セン[セー]ダ	セン[セー]ダ
	先生だった	セン[セー]ダッタ	セン[セー]ダッタ
	先生だった女	セン[セー]ダッタオン	セン[セー]ダッタオ

		[ナ	ン[ナ
	先生だった男じゃなくて先生だった女	セン[セー]ダッタオトコ[ジャ]ナク[テ]セン[セー]ダッタオン[ナ	セン[セー]ダッタオトコ[ジャ]ナク[テ]セン[セー]ダッタオン[ナ
	先生なの？先生だったの？	セン[セー]ナノ？セン[セー]ダッタノ？	セン[セー]ナノ？セン[セー]ダッタノ？
形式名詞			
	今大事なのは宿題を終わらせることだよ	イ[マ]ダイジナノ[ハ]シュクダイ[オ]オワラセ[ル]コトダヨ	イ[マ]ダイジナノ[ワ]シュクダイ[オ]オワラセ[ル]コトダヨ
	苦手なのは朝早く起きること	ニガ[テ]ナノ[ワ]ア[サ]ハヤ[ク]オキ[ル]コト	ニガテナノ[ワ]ア[サ]ハヤ[ク]オキ[ル]コト
	もう店に入ってるはずだよ	[モー]ミセ[ニ]ハイッテ[ル]ハズダヨ	[モー]ミセ[ニ]ハイッテ[ル]ハズダヨ
	ここは飛行機が飛び立つところだ	ココ[ワ]ヒコウキ[ガ]トビタ[ツ]トコロダ	ココ[ワ]ヒコウキ[ガ]トビタ[ツ]トコロダ
	これから飛行機が飛び立つところだ	コレカ[ラ]ヒコウキ[ガ]トビタ[ツ]トコロダ	コレカ[ラ]ヒコウキ[ガ]トビタ[ツ]トコロダ
	それは皆に支持されている考えだ	ソレ[ワ]ミンナ[ニ]シジサレテイ[ル]カンガエダ	ソレ[ワ]ミンナ[ニ]シジサレテイ[ル]カンガエダ
	彼は辞職する考えだ	カレ[ワ]ジショクス[ル]カンガエダ	カレ[ワ]ジショクス[ル]カンガエダ
テ形＋補助動詞			
	(魚を) 食べてみる	タベ[テ]ミル	タベ[テ]ミル
	(魚を) 食べてもらう	タベ[テ]モラウ	タベ[テ]モラウ
	(魚を) 食べてしま	タベ[テ]シマウ	タベ[テ]シマウ

	もう		
	(暇だし) 手伝ってあげる	テツダッ[テ]アゲル	テツダッ[テ]アゲル
	(好きな曲を) 歌ってくれた	ウタッ[テ]クレタ	ウタッ[テ]クレタ
	(タクシーを) 呼んでもらう	ヨン[デ]モラウ	ヨン[デ]モラウ
	焼いてあげたの？ 焼いてもらったの？	ヤイ[テ]アゲタノ？ ヤイ[テ]モラッタノ？	ヤイ[テ]アゲ[タ]ノ？ ヤイ[テ]モラッ[タ]ノ？
テ形+動詞			
	(魚を) 買って食べた	カッ[テ]タベタ	カッ[テ]タベ[タ]
	(魚を) 焼いて食べた	ヤイ[テ]タベタ	ヤイ[テ]タベ[タ]
	(魚を) 皆で座って食べた	ミンナ%デ]スワッ [テ]タベタ	ミンナ[デ]スワッ[テ] タベ[タ]
	買って食べたの？ 買って飲んだの？	カッ[テ]タベタノ？ カッ[テ]ノンダノ？	カッ[テ]タベ[タ]ノ？ カッ[テ]ノン[ダ]ノ？
その他			
	これは違う可能性がある	コレ[ワ]チ[ガウ]カノ ウセイガアル	コレ[ワ]チ[ガウ]カノ ウセイガアル
	雨が降る恐れがある	アメ[ガ]フ[ル]オソレ [ガ]アル	アメ[ガ]フ[ル]オソレ ガアル
	雨が降る気がする	アメ[ガ]フ[ル]キガス ル	アメ[ガ]フ[ル]キガス ル
主格名詞句+自動詞			
	油がはねた	アブラ[ガ]ハネ[タ]	アブラ[ガ]ハネ[タ]
	授業が始まる	ジュギョウ[ガ]ハジマ [ル]	ジュギョウ[ガ]ハジ マ[ル]
	弟が泣いた	オトート[ガ]ナイ[タ]	オトート[ガ]ナイ[タ]
	熱がぶり返した	ネツ[ガ]ブリカエシ [タ]	ネツ[ガ]ブリカエシ [タ]

	電車が来る	デンシャ[ガ]クル <sup>ノ</sup> ヨ	デンシャ[ガ]クル
	ねずみが鳴いた	ネズミ[ガ]ナイ[タ	ネズミ[ガ]ナイ[タ
対格名詞句＋他動詞			
	ビールをついだ	ビール[オ]ツイ[ダ	ビール[オ]ツイ[ダ
	ビールを飲んだ	ビール[オ]ノン[ダ	ビール[オ]ノン[ダ
	飴を貰った	アメ[オ]モラッ[タ	アメ[オ]モラッ[タ
	ビールをこぼした	ビール[オ]コボシ[タ	ビール[オ]コボシ[タ
	ガラスを割った	ガラス[オ]ワッ[タ	ガラス[オ]ワッ[タ
	おもちゃを壊した	オモチャ[オ]コワシ [タ	オモチャ[オ]コワシ [タ
斜格名詞句＋自動詞			
	駅から戻った	エキカ[ラ]モドッ[タ	エキカ[ラ]モドッ[タ
	駅に向かった	エキ[ニ]ムカッ[タ	エキ[ニ]ムカッ[タ
主格名詞句＋形容詞			
	油が多い	アブラ[ガ]オー[イ	アブラ[ガ]オー[イ
	授業が面白い	ジュギョウ[ガ]オモシ [ロイ	ジュギョウ[ガ]オモシ [ロイ
	弟がかわいい	オトート[ガ]カワ[イ ー	オトート[ガ]カワ[イ ー
	熱が高い	ネツ[ガ]タ[カイ	ネツ[ガ]タ[カイ
	電車が速い	デンシャ[ガ]ハ[ヤイ	デンシャ[ガ]ハ[ヤイ
	あずきおいしい	アズキ[ガ]オイ[シー	アズキ[ガ]オイ[シー
	財布がない	サイフ[ガ]ナイ	サイフ[ガ]ナイ
	元気がない	イ[マ]ゲンキ[ガ]ナイ	ゲンキ[ガ]ナイ
存在動詞			
	授業がある	ジュギョウ[ガ]アル	ジュギョウ[ガ]アル
	私には弟がいる	ワタシニ[ワ]オトート [ガ]イル	ワタシニ[ワ]オトート [ガ]イル
	熱がある	ネツ[ガ]アル	ネツ[ガ]アル
	教室に友達がいる	キョウシツ[ニ]トモダ チ[ガ]イル <sup>ノ</sup> ヨ	キョウシツ[ニ]トモ ダチ[ガ]イル

	妹には娘がいる	イモウトニ[ワ]ムスメ [ガ]イルノ	イモウトニ[ワ]ムス メ[ガ]イル
--	---------	-----------------------	----------------------